non-stop!

朔良梨里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｎｏｎ－ｓｔｏｐ！

【Ｎコード】
Ｎ５１２５Ｅ

【作者名】
朔良梨里

【あらすじ】
勝気な女の子・瑞穂。ある日知らない男の子から「俺と結婚してくれない？」ってプロポーズされて・・・どたばたラブコメディ！

プロローグ&1―プロポーズ？―　1

non―stop!

プロローグ

瀬名瑞穂。

十七歳。

趣味はスポーツ。

サッカーでもバスケでも何でも出来る・・・つもり。

彼氏なし。

初恋もまだ。

五人兄妹の末っ子。

上は全部兄。

恋なんて私には全然関係ないと思ってた。

なのに・・・

「俺と結婚してくれない？」

なんて。

一体何でぇっ！

１―プロポーズ？―

家に囲まれた空き地。

私はそこにいた。

「参った？」

一応優しい声のつもりで言った。

「すみません。もうしませんっ」

向こうは本気でビビッているようだ。

「分かったならそれでよい」

ばたばたっと、勝負に負けた男子どもは走って逃げていった。

ったくホント弱いんだから。

今日は向こうから仕掛けてきたわりに、あっさりと終ってしまった。

放課後は毎日男子と喧嘩。

もしくはスポーツ対決。

はぁ、とため息をつく。

「こんなんだから恋も出来ないのかなぁ・・・」

私は男の中で育ってきたからか、妙に運動神経がよかった。

体育はいつもオール五だったし、性格も男勝りで小さいときからよ

く喧嘩をしていた。

そのせいか・・・恋をしたことが一度もない。

男子には女として見られてないか、恐れられているかで、あっちから近づいてくる奴なんかいない。

第一私自身が興味なかったし。

だけど、さすがに高二にもなると、・・・気になるんだよなこれが。

恋がしたいっ！

でも、さっきみたいに所かまわず喧嘩を買っちゃう性格だから。

ちょっと無理っぽい。

それに・・・恋がしたいしたいっていう割には、好きって感情が分からないし。

自分でもわかんない。

まあ、気を取り直そう。

ひょいっとへいを乗り越えて空き地を出る。

そのまま走り出そうとしたら、誰かとぶつかってしまった。

「あっ、すみません」

「こちらこそ、・・・ん？」

その人と目が合う。

私と同い年ぐらいの男の子だった。

でも高そうな服を着ている。

うわ、あれってたっかいブランドものだ。

きっと私たちのような一般庶民には手も出せないような値段なんだろうなぁなんてことを思っていると、向こうから私に話しかけてきた。

「君ってそこの高校の学生だよね」

「そうだけど・・・」

男の子はなぜかうれしそうに「そっか」と言った。

「ところで君の名前教えてくれない？」

ずいぶん馴れ馴れしい。

「えっと、瀬名瑞穂ですが何か？」

一応言うと相手は満足したようで、じゃあと去ってった。

・・・何なんだ？

しばらく立ち尽くしていた。

「あ・・・」

あの人の名前訊くの忘れてた。

訊くだけ訊いといて自分は名乗ってなかったじゃん！

まあいっか。

またどこかで出会うわけでもないし。

その後はまっすぐ家に帰った。

さっきであった男の子のことなんて、忘れていた。

宿題を済ませてご飯を食べてお風呂に入って、ベッドの上にごろんとした。

「いつか・・・恋ができるといいな・・・」

なんて。

考えていた。

2

翌日――――
私はいつもどおりに学校に登校した。
私の通う高校は、比較的家に近く、通いやすい場所にある。
だから遅刻しそうになっても死ぬ気で走っていけば、たいていはぎりぎり間に合う。
今日は寝坊をしなかったからよかったのだけれど。
校門をくぐると、私の親友の中谷真理サンが「おっはよーっ」と手を振っていた。
彼女の元へ駆け寄っていく。
「おはよーっす」
「今日も元気だねぇ」
「別にそんなことないし。つーか、あんたのほうが元気でしょ」
すると真理が、
「いや、なんか昨日と違うっつーか、……もしかして素敵な出会いしちゃったとか？」
人の話し聞いてない。
しかも…半分図星じゃん。
「ぶっ……何言ってんのあんた。そんなことないし」
そうだ、あれは別に、ねぇ？
「まったぁ。このっ」
「はぁ……」
このとおり、中谷真理という人物は、人のことにとても興味がおありなようで、詮索癖があるというか、鼻が利くというか。
まあ、そのおかげで情報がとても手に入りやすいのだけど。
そんなこんなで靴箱のところまで行くと、後方からダッシュでこ

ちらに走ってくる方が一名。
「おっはよぉっ」
と私に抱きついてきた。
「うわっ、なにするんだよっ！しかも人ごみの中で」
「ごめんっす」
といったこの人は上矢里香さん。
人なつっこいコだ。
イメージはポメラニアン。
「瑞穂さんったら、朝っぱらからかっこいーよっ」
「どこがだよっ」
「まぁまぁ二人とも。あっそうだ、今日さ、転校生が来るんだって」
「それ、ホント？」
転校生とは珍しい。
「本当だよっ☆このアタシが言うんだから間違いなしっ！」
「どんなひとかなぁ。瑞穂さんみたいにかっこいい人だといいのにぃ」
「おいおい。それもどうかと」
やっぱり私のイメージはかっこいいかよ。
「あ、ちなみに男らしいよ」
真理はそういってわたしの肩をぽんとたたくと、
「いい男だったら、チャンスだぞっ」
と笑顔で言った。
「あはは……はは」
やっぱりそうなのかよっ！

気づくことない出会い。
別れ。
そして……再会。

三人の姿を遠くから見ている影があった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5125e/

non-stop!

2010年10月12日03時22分発行